鉄格子の灯

# 運命に流されて

朴 三中 著
趙 万吉 訳

国書刊行会

鉄格子の灯―

# 運命に流されて

運命に流されて——鉄格子の灯——　ISBN4-336-03245-9

平成3年3月15日印刷
平成3年3月20日発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者　朴　三　中
訳者　趙　万　吉
発行者　割　田　剛　雄

〒170　東京都豊島区巣鴨3－5－18
発行所　株式会社国書刊行会
電話（3917）8287（代表）FAX. 03(3940)2653

落丁本・乱丁本はお取替いたします。印刷・セイユウ写真印刷㈱　製本・大口製本印刷㈱

# 日本語版への序

日本語版が出版されるとの報を受け、非常によろこんでいます。

韓国と日本は、歴史的にも文化的にも、深い関係を結んできました。わが韓国の祖先たちは、たくさんの文物を日本に伝え、また多くの人が日本に渡りました。

こうして、同じ文化圏内に位置する韓国と日本は、相互に影響しあいながら、それぞれ独自の民族文化を築きあげてきました。このたび、本書が日本語に訳され、日本の未知の読者に届けられることで、韓日の文化交流に少しでも寄与でき得るならば、これに過ぎる喜びはありません。

本書には、何人もの死刑囚が登場します。刑務所内でケガをしたスズメを治療し、監房で飼う死刑囚。投獄され、自由を失い初めて生命の尊さを悟る青年など……。そして、死刑囚を取り巻く母、妻、兄弟姉妹、恋人、宗教者など、運命に流されながらも必死に生きる人間模様を描きました。

死刑囚の罪と罰、明日なき生命の苦悩と魂の救い……、死刑囚の人生物語は民族を超えたテーマです。

私は刑務所の教誨説法のとき、いつも、小さな我執を捨て、〝空〟のような大きな心を持とう！現世にあくせくあがくのではなく、来世につながる永遠の人生を生きよう！　と呼びかけています。

もとより、犯罪は根絶されねばなりません。本書に登場する人達の多くも、好んで犯罪をおかしたのではありません。運命のいたずらにあい、一瞬の狂気のなかで、極悪非道の犯罪をおかしているのです。罪は憎みます。しかし、また、罪をおかし、懺悔する人の魂も救われねばなりません。

日本の読者が、本書をどのように味読してくださるか、一抹の不安と、大いなる期待に胸ふくらませています。

一九九一年一月

朴　三　中



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 運命に流されて／目次

因　縁……3
悪　縁……25
ある帰休……37
正義を盗んだリヤカー引き……63
生命への愛……85
三人の母……130
犯罪と愛……236
愛の美学……300
生と死の岐路……312
生の求道者たち……368
回　生……414

# 因縁

どんよりと垂れこめた鉛色の空から、ちらちらと粉雪が舞っていた。時折、狂ったように強い風が琵瑟山を襲い、まだ十分に背の伸びきらない松の若木を震わせている。

何に驚いたのか、スズメたちがぱっと飛び立った。

（もしかしたら、このスズメたちは、永根の化身ではなかろうか？　恩を忘れぬ永根。）

十月二十六日、方永根の命日である。

毎年、私は彼の命日にここを訪れ、お供え無しのお墓参りをする。スズメを友とした死刑囚。般若心経をしっかりと唱えながら、安らかに死出の縄を受けた死刑囚方永根。彼が自由を得て久しい。スズメと化して彼は自由なのか、あるいは生前ゆきたがっていたところで、安心立命を得たのか？　いずれであれ方永根は、墓参りに来た私をなつかしく見つめているに違いない。

「永根、あなたは前世にわしの弟であったような気がしてならない。わしはそう思う。あなた

が自由を得たあの日に、居てやれなかったのが、悔やまれるのだ。せめて命日の今日、そなたに会いに来た。……安らかに眠ってくれ。」

私は、左手に持った木魚を右手でゆっくりとたたいた。

……観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舎利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是……

暗闇が、眼帯のように目の前を覆った。

土盛りの低いみすぼらしい、墓の上に、雪が積っていく。

永根は、ここに葬られたくなかったに違いない……死後ですら人びとからうとまれ、押しこめられるこの荒れはてた地には……。

彼に初めて会った時のことが思い浮ぶ。

私が寺の檀家さんたちとささやかな食事をつくり、死刑囚を見舞った、あの日である。

看守長と口論の末、彼らは獄外食事が認められ、看守長室で、いっときの自由を与えられた。久しぶりに食事らしい食事をとる彼らを見て、胸が熱くなるのを禁じえなかったものだ。刑務所側からすれば冒険であった。死を目前にしている者は、何をしでかすか分ったものでない。とり

わけ、仲間意識の強い受刑者十五名をひとつ所に集めて、自由にさせるというのは、火薬庫に火を近づけるのと同様、危険この上ないことである。心をこめて食事をつくった檀家さんたちを人質に、騒ぎでも起したら、一体、その責任を誰が負うのかと、強く反対されたが、その心配は取越苦労であった。

手錠をはずされた彼らは、物音ひとつ立てずに箸だけを動かし、行儀よく食事をしているではないか！　先入観というものがいかに偏見に満ちたものかを、目の当りに見せてくれる光景であった。

十五人の死刑囚のどの顔にも、凶悪犯のかげなど微塵もなかった。顔色が蒼白で、番号のついた囚人服を着ているとはいうものの、身に余るものだという表情で、つつましく食事をとっている。私は瞼が熱くなるのを覚えた。

数百人もの人が、一カ所で食事をするような時でも、人っ子ひとりいないように、静かに食事するようしつけられている受刑者の行儀作法を、そこに見ることができた。まことに驚くべきことであった。沈黙の中で、私は己の目と耳を疑っていた。どこの寺の修行僧の集りも、このような落ち着いた雰囲気は醸しだせるものでない。

食事が終ると果物がでた。

その時、誰かが立ち上がった。

「自分たちは凶悪犯であります。人を殺すなど、最も悪いことを平気で犯した罪人なのです。遠からず、死をもって罪を償わねばならない自分たちへの温かいお恵みに、どのようにお返ししたらよいか分りません。特に、自分たちはキリスト教徒で、皆さま方は異教者でいらっしゃるというのに……」

落着いた、丁寧なことばづかい——。

私は声の主に目をやった。

整った顔だちの、中背の若者の印象は、善良さと、素朴さがにじみでていた。

その彼に、個人教誨の時再び会うことになったのである。

最初会った時もそうであったが、どうしても、どこかで会ったようような気がしてならなかった。

「もしかしたら、ずっと以前、どこかで会ったことが?……」

方永根は、ちょっぴり微笑を浮かべたまま、無言で私をみつめた。

「これといった、はっきりした記憶ではないのだが、どこかで会ったことがあるような気がして……」



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「和尚さまのお目に止ろうなどとは夢にも思いませんでした。実は、青河の宝鏡寺で、お寺の由来を説明された時……もう十五年も前の事ですが……」

「何と！　その時の記憶をどのようにこれまで……」

宝鏡寺は、十二瀑布がある有名な名勝地である。日に数百人もの参拝者のあるお寺なのだ。私は修行僧の頃、そこに身を寄せ、迷い惑いながら求道の日々を送っていた。

「その時、自分は国民学校五年生でした。授業をさぼり、観光バスにこっそり乗りこんで、どことも知らぬまま行きついたのが、あるお寺だったのですが、それが宝鏡寺でした。見知らぬ人びとに混ってうろちょろしているうちに、六合杖をもって、お塔や舎利を案内する若い和尚さんにお目にかかりました。大人たちの中で、そっと見上げたそのお姿が、何故か忘れられませんでした。それが、このような無様な姿で再びお目にかかろうとは……」

彼は、ことばじりを濁した。

しみじみとした物言い、あたかも修行僧を連想させるような物腰、彼とは、はるか以前に蒔かれた因縁の種で、しっかりと結ばれていた。不思議といえば不思議な因縁であった。天真爛漫な少年が、名も知らぬ寺で、参拝者と案内僧として初めて出会い、今、再び、死刑囚と教誨僧として結ばれたのだ。だがこの因縁は、もう後がない因縁であった。彼に力をと思うのだが、といっ

て、何をしてあげられる？　死刑の執行だけを持っているはずの彼に……

しかし、彼の顔に浮ぶほのかな笑みは、清く澄んでいた。私が忘れていた因縁を、彼はたぐり寄せているかのように見えた。その顔は、しばし、幼い頃のあの日に帰ったかのように、明るく澄んでいた。

彼のつつましい態度と落着いた物言いは、とても死刑囚には思えなかった。そして、不思議なその因縁が、私に強い関心を抱かせた。私は、彼が死刑囚となった経緯を聞いた。

「生まれは、慶北迎日郡杞渓面です。父はそこの面長（日本の村長にあたる）を務めたこともある名士でもありましたが、自分は、その父の女道楽の、いわば副産物だったんです。貧しい家の生まれで、器量のよかった母は、父のような男の女遊びの相手にお誂え向きだったんでしょう。お金が幅を利かす世の中ですから、結局、父の第二夫人となったのです。しかし、それがもとで、母屋の方の義母は病にかかり、とうとう亡くなってしまいました。そこで、大変なことになりました。腹違いの兄や姉が騒ぎだしたのです。母は、結局家から追われる羽目になったのです。母が家を出た後、父は新しい女を家に引き入れ、弟が生まれました。私は腹違いの四人の兄姉と弟に挟まれた余計者、邪魔で目ざわりな存在になったのです。」

己の出生を語る彼の目は、虚空をさまよい、焦点を失い揺れている。あたかも、無用な己の存

在をなぞるかの如く。

「父が亡くなる八つの時までは、それでも時たま、父がかばってくれたりしましたが、父の死後は、ただ一つの支えもなくなったのです。家を出た母のところへ行くことも考えましたが、飲み屋のお手伝いをして、自分ひとりの生活がやっとな母に無理もできませんでした。といって、腹違いの九人兄弟のひどい仕打ちといじめに、いつまで耐えられるか、その自信もありませんでした。」

深い悲しみを宿した永根の視線が虚空から、足元へ落ちた。

「ある日、なんのあてもなしに、家を飛び出しました。放浪生活のはじまりだったんです。中国人の家のボーイ、食堂の下働き、煉炭配達……いろんな仕事を転々としました。そうこうしているうち、腹違いの姉のひとりが見るに見かねたのか、あるプラスチックの工場を紹介してくれました。国民学校にも行かずひどい仕事をしているのを、他人の目にさらすのが嫌だったんでしょう。香伊（ヒャンイ）と知り会ったのはそのプラスチック工場でした。愛に飢えていた自分に、その娘（こ）は姉のように優しくしてくれました。そのうちに、私は、香伊に会わない日には、気がどうかなりそうにまでなりました。私たちは、結婚を約束するまでになり、彼女の両親の許しを得ようと二人で釜山（プサン）にある香伊の家へ行ったのです。

「お嬢さんと結婚したいんですが、戴けませんでしょうか？……」

香伊の父親は、突然訪れた若者を訝しげに見やり、彼の身上を根ほり葉ほり問いただした。ありのままの答えを聞いた後、まず娘に向って「駄目だ、駄目！　どこの馬の骨とも知れぬ文なし男を連れて来て、お前、それが話になると思っとるのか！　与太話もいい可減にしろ！　許さん！　お前がその男から離れない日には、わしが足の骨をへし折ってやる！」と恐しい剣幕で香伊を怒鳴りつけた。

そして、永根に対しても語気を変えなかった。

「お前さんがどこをどう流れて、ここへまで来たんか知らないが、もう二度とわしんとこの香伊に近寄らないで欲しい。もし、勝手なまねでもしたら、その時は、ただでは済まさんぞ！」

二人は、ひどくがっかりした。

しかし、もう、どんな力も二人を引き離すことはできなかった。香伊は、両親の反対を押し切って、駆落をしてでも永根と一緒になろうと心をきめていた。もはや、永根なしの生活など考えられなかったのだ。

貧しいながらも幸せな彼らの新婚生活に暗雲が垂れこみはじめたのは、永根が勤めるプラス

チック工場で、学歴を偽り就職していたのがばれてからである。

工場を追われて、路頭に迷っていた彼らのもとに、ある日香伊の姉が訪ねて来た。彼女は、懐から何かを大切にくるんだ小さな紙包みをとりだした。

「これ、わたしがお嫁にいった時、主人がくれたものなの。それほど値打ちのあるものではないけど、質にでも入れればお部屋を借りる位の金になるわ。とりあえず、部屋を借りて、仕事を見つけ、その後で返してくれればいいわ。さあ、早く取っといて。」

金のネックレスを香伊の手に握らせる姉の優しい心遣いは、冷笑と憎悪の目の中で生きて来た永根には、別世界のことのように思われた。世の中にはこのような人も居たんだ、と驚きながら、永根は感謝と喜びをどのように表わしていいか分らず、しばらくはことばも出なかった。

「ほんとにありがとうございます。お義姉(ねえ)さん、自分が一生懸命働いて、きっととり戻し、お返しします。こんなに気をつかって下さって、ご恩は決して忘れません。」

だが、思う通りにいかぬのが世の常である。

来る日も来る日も、朝から晩まで、あっちこっちと駆けまわったが、仕事は見つからなかった。

彼は再び絶望に陥った。

どんなことがあっても、ひとの善意を裏切るようなことは、あってはならない、彼の頭の中は、

このことでいっぱいであった。

万策が尽きた彼は、実家を出てからただの一度も考えなかった、兄への無心を決心した。

「何？　お前ごとき者に金を貸す？　この野郎め！　とことんまで落ちるがいい。俺(おれ)たちの母が、誰様のお陰で亡くなったか、知って居ての話か?!　てめえ、ここをどこだと思って、ずうずうしく無心を吐きやがるんだ。見たくもないから、とっとと消え失せろ！　二度と顔など見せるんじゃない！」

ろくろく話もできぬまま、そこを追われた永根は、あてもなく歩きつづけた。彼の目には、物心ついてから、一度も見せなかった涙があふれたいた。

「これから、どうしよう……これから、どうすればいいんだ？……」

乳白色に曇った視野の中を、幾つもの顔が、浮んでは消えた。

苦悶でゆがむ香伊の顔、義姉(あね)のひとのよい顔もよぎっていった。目玉をぎょろつかせながら、突っかかってきた兄の顔が、彼の胸をグサッと刺しながら消えていった。

もう道はなかった。彼は、袋小路にたたずむ自分の姿を、ぼんやりとした意識のなかに見ていた。何故このような苦しみを味わなければならないんだ！　はっきり分らぬまま、彼は、ある漠然とした憎悪が芽ぶき育つのを覚えた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com